



## 管見・フランスの子どもの世界

——規範のしつけの問題を中心に——

宮 島 喬

### 突き放した冷たさ

高校生の頃だったか、ジュール・ルナールの『にんじん』を読んだ。いま読み返すと、残酷さのなかの暗いイロニーにも大いに心惹かれるが、当時はそんなことよりも、「こんな家庭があつてなるものか」と、この呪われた少年への同情でいっぱいだった。著者の少年時代といわれるこの主人公は、父からは冷たく無視され、母の絶えざる叱責にさらされ、兄姉からはいつも嘲弄の対象とされ、自分をあたかも孤児のように感じる。いな、実の

親をもちながらこのような酷薄の世界におかれるくらいなら、いっそ本当の孤児であつたならばよいのに、とさえ、少年は思うであろう。いわゆる継子いじめと類似の主題のように感じられるところもあるが、ここでは父親さえも少年に冷たいのであり、物語の舞台はなに欠けるところのないブルジョワ家庭なのだ。いま思うに、ブルジョワ階級の興隆と共に子どもへの配慮、愛情を中心に置く家庭生活が生まれた、と説くフィリップ・アリエスの考察と、いったいどう重ね合わせてこの物語を読んだらよいのだろうか。

もうひとつ、フランスの子どもというと、心に浮かぶものがある。子どもの歌としてよく愛唱されるシャンソンに「月の光に」(Au claire de la lune) というのがあり、曲想は詩的で、透明でなかなか魅力に富んでいる。

ところが、あるとき歌詞の二番をきいてみて、おやっと思いの感を受けた。月の光の下にピエロが立っていて、家のなかの少年に語りかける、手紙を書くので君のペンを貸してくれないか、ろうそくが尽きてもう灯あかりもないんだ、神様のおぼし召しと思つてきみのドアを開けてくれたまえ。以上を承けて、二番はいう。

月の光の下にいる／友だちのピエロよ／ぼくはペンをもっていないし／もうベッドに入つてゐるんだ／お隣りに行つてくれたまえ／きつとだれかが起きてゐるよ／だつて台所で火打石の音がきこえるもの

この歌詞を解釈するなどという大それたことは、わたしにはできない。ただ、感ずるに、通常われわれのい

けなくはねつけて「お隣りさんへ行つてくれ」という子どものことは異例である。子どもの世界は友情とか思いやりとかやさしさといった親和的な主題でえがかれるのがふつうだと思ひこんでいる者には、この突き放した冷たさはどうも同化しにくい。と同時に、その冷たさは、西欧、そしてフランスという異文化のなかでの子どもの位置をなにかしら暗示しているように思えて、わたくしには興味が尽きないのである。

いきなりこんなことから書きだしたのも、じつはわたしの「偏見」をあらかじめ提示しておきたかつたからである。読んだり聞いたり、またこの国に実際に住んで経験したかぎりでは、フランスでは子どもが、特別に保護され、いたわられた、甘やかな、いわゆる「子どもの世界」のなかに包みこまれてはいないのではないか、という印象が強い。ことに日本とくらべてそう感ずる。そう感ずるにいたつたいくつかの経験はのちに紹介したいと思うが、『にんじん』はわたくしが初めて瞠目しつゝのぞいたこの国の少年の世界であり、月下のピエロのシ

ヤンソンは、親和的ならざる自一他関係が子ども文化の主第となりうるのか、というちょっとした驚きをあたえてくれたものである。では、フランスの子ども観のなかに流れているものは何なのだろうか。

### 「マテオ」の子殺し——許されざる行爲

右の「偏見」のみちびくところにしたがい、ふたたび文学作品を例にとれば、だいぶ古典となるが、プロスペル・メリメの「マテオ・ファルコーネ」が目止まる。

「マテオ」はほんの小さな短編で、コルシカ島を舞台として一組の父子のあいだに生じる悲劇を扱っている。

(なお、『コルシカ紀行』(中公新書) ほかで大岡昇平氏の展開している「マテオ」の主題の歴史的考察はたいへん興味ぶかいことを付記する。)官憲に追われている「おたすね者」をいったんは匿ってやった十歳の少年フォルチュナトは、やがてそこに現われる追手の隊長のちらつかせる銀時計について心をうごかされ、隠れ場所を教えてしまい、「おたすね者」は探しだされ、しょっぱかれて

いく。この事実を知った少年の父マテオは、信義をふみにじった恥ずべきわが子を、おのが手で射殺する。

「……マテオは鉄砲の撃鉄を揚げ、ねらいを定めながら、言った。

——神様に許してもらえ!

子供は起き上がって父の膝に抱きつこうと、必死の努力を試みた。が、間に合わなかった。マテオは引き金を引いた。フォルチュナトはぼったり倒れてことされた。

死骸の方は振り向きもせずに、マテオは家路をさして歩き出した。子供を埋めるために鋤を取りに行くのである。」(杉捷夫訳)

まさに悲劇中の悲劇である子殺しを、これほどに感情を殺した、乾いた簡潔なタッチでえがいた文章をわたくしは知らない。死をもってする裏切への制裁はこの島独特のふるくからの掟だ、といってしまうばそれまでであるが、それが十九世紀の作家によってとりあげられ、読者から感銘をもって読まれたとすれば、やはりそこには人びとに共有される、ある〈子どもへの眼〉が示され

ているとみてよいのではないか。

憲兵隊長のちらつかせる銀時計の魅力に心ゆくぶられ、抗しきれなくなるところに、十歳の少年の可愛げのある「子どもらしさ」をみてとる向きもある。日本だったら、「やはりそこは子どもだ」と、鷹揚にみるおとなの眼が支配的であるかもしれない。しかし、「マテオ」の眼はきびしい。いったん「おたずね者」を匿ってやると約束した以上、少年はすでに子どもの世界にはなく、大人たちの信義の世界にコミットしたことになる。この世界では、十歳の子どもであるがゆえに大目にみる、という特別のゆるしや酌量はあたえられない。自分の行為から結果した事態にたいしては、大人とおなじように責任を負わなければならないということなのだ。作家メモの筆も、その心のうちとはかく、フォルチュナトへの同情を微塵もあらわさず、他愛なく自分の欲望に敗けて大人の世界のモラルの厳しさに耐えることのできなかつたことゆえの悲劇として、少年の運命をえがいているといつてよい。

子どもが自分の欲望に敗け、その結果、慄然たる思いでみずからの行為の結果に向き合わなければならない、というシチュエーションの設定になる文学作品はほかに幾つもあるように思う。たとえばアルフォンス・ドーデの『月曜物語』（岩波文庫）のなかにおさめられた、これも短編の「少年間諜」というのがある。

パリがプロシヤ軍の包囲下にある普仏戦争のさなか、少年ステファーンは、プロシヤ軍に新聞を売りにいくと三十フランにもなる、と仲間の少年に教えられ、その誘惑にたいに抗しきれず、仲間と共に新聞を隠しもってパリの城門を抜けだす。首尾よくプロシヤ軍の陣営にたどりついた少年たちは、望みどおり銀貨を手に入れる。それのみか相棒の少年はパリの国民軍の出陣準備の報をプロシヤ軍に通じ、その報酬としてか袋いっぱい馬鈴薯をせしめる。家にもどったものの、後悔と不安にさいなまれたステファーンは、プロシヤ軍の所へ行って銀貨を手に入れたことの一部始終を白状する。これを知った、公園の番人をしている年老いた父親は、「よし、おれはこ

れを返してくる」と、少年から銀貨をとりあげ、銃をとり、ふりむきもせずに家をあとし、折から出陣行進中の一部隊に身を投じる。以来、その界限は二度とふたたびその老人の姿をみることはなかった、と小品はむすんでいる。

### 子ども——欠如態？

あらたまつて問うのもおかしいが、「子ども」とはいつたいなにか。なにであつたか。

「子ども」、「幼児」などを意味する infant とか enfant は、語源的にはラテン語の infans (話さない、無言の、訥弁の) ということばに由来している。言語の能力の欠如という意味であるが、さらにはロゴスの欠如といった意味もこめられていたにちがいない。おとなにくらべて不完全で未発達な、いわば欠如態であるという見方が、かつて子ども観の基調をなおしていたのだと思う。今世紀初頭の社会学者エミール・デュルケムなども、どちらかといえばこの見方の系列に立ち、「幼児期」

(enfance) というものを定義して「身体的、道徳的にいまだ未発達で、未形成であるような個人の成長の時期」と述べている。こうした考え方に對して、百八十度といわぬまでも力点の置き所がちがう子ども観が、ジャン・ジャック・ルソーによつて、また現代の心理学者や教育学者によつて唱えられていることは、周知の通りである。少し大げさにいうと、おとなの世界では疾うに失われているか、抑圧されてしまつてゐる無垢、善良、自然、感じやすさなどこそが、子どもの世界をなしている、とする見方である。しかし、この国の人びとの子ども観では、やはり「無垢なる子ども」のイメージは多数派とはいえないという印象をうける。といつて、單純に子ども性悪説というわけでもないが、不充分で不完全で、社会化を必要とする、要するに欠如態である、という見方がどうも基調をなしているように思えてならない。

フランスの町なかでよく見かけるひとつの光景を再現する。日本でいえばさしづめ東京駅にあたるパリのリヨン駅の巨大な構内で、「切符を買いに行つてくるから荷

物の番をしていなさい」といわれた八、九歳の少年が、「ひとりはいやだ、ほくも行きたい」と駄々をこね、けわしい形相の若い母親からパチンと平手打ちをくらっているのを見たことがある。その効あってか、少年はトラックのそばで半べそをかきながらもじっと数分間立ち番をしていた。往き交り乗客のなかでこの母親の平手打ちの光景に格別ふりかえる者もいなかったことは、それが日常茶飯の親子の情景であるからだろう。日本の若い母親ならばおそらく「仕方ないわねえ」とこぼしながら、重い荷物に子どもの手を引いて、切符の窓口に向かうことだろう。

「七歳になるまで子は神様」ということばが日本にはある。多義的なことばではあるが、これは、子は宝、さずかりもの、多少の腕白はむしろ元氣のよい証拠、やかましいこといわずにのびのびとふるまわせたほうがよい、という考え方につながっている。しかしフランスでは、自分の欲望を無拘束の自由のなかで押し通そうとする子どもの行動様式を「腕白」とか「やんちゃ」という

肯定的なひびきをもったことばで表現することはあまりないようだ。駄々っ子への母親のきびしい叱責の意味するのは、こういう子どもは自分の欲望を制することのできない、弱い、それだけにより多くの規律と訓練を要する存在だということではなからうか。

### インパースナルな規範の習得を

ところで、子どもにたいしてどこされる社会化、あるいはしつけの特徴であるが、わたくしはつねづねフランス人のある特性に印象づけられてきた。平手打ちをくわせたり、お尻をぶったりと外目にはずいぶん手荒い制裁もくわえるようだが、そのねらいは規範の習得におかれています、親という社会化のエイジェントに個別に従順ならしめるということではないようだ。くだいていえば、親のしつけは、「文句をいわずにお母さん（お父さん）のいうことをききなさい」というかたちをとらずに、「～をすることをよくないことだから（～のきまりに反することだから）してはいけません」という仕方

行われることが多いように思う。インパースナルな規範の習得といったらよいだろうか。

著名な評論家アンドレ・シエグフリードはかつてフランス人を評してこう書いている。「フランス人は、自身によって考え判断することを求め、どんな官職のまへにも頭をさげない。それによってフランス人は、きわめて反公式主義者であり、反全体主義者である。フランス人が、思いきって批判精神のすべてを犠牲にしてまでも、熱狂的に盲目的に一つの命令にしたがうことがあるとしたら、それは、一つの原則、一つの組織、一つの政策に対する狂信的な献身からであり、ドイツ人にみられるように、服従の気質からではない」(福永英二訳『西欧の精神』)。「ドイツ人の服従的気質」云々はともかくとして、フランス人の精神というものがパースナルな人間関係への適応によりも、インパースナルな理念とか原則とか規範とかに志向するかたむきのあることは、わたくしの実感にてらしても肯定できる。かれらは、理屈ぬき、論理ぬきで人に従うことを好まないし、したがって

理屈ぬき、論理ぬきで人を服従させることも好まない。そのことが、子どもへのしつけの態度のなかにもつらぬかれてくるのではないかと思うのである。

じっさい、特定人格への服従をもとめるしつけと、規範の遵守をもとめるしつけという、二つのしつけの型の区別は重要である。たとえば、お菓子屋のショーウィンドーの前で「あれが欲しい」と言い張ってきかない子どもに対して、日本の母親のなかには「駄目です、どうしてお母さんのいうことがきけないの」とだけ叱る者がけっこう多いように思われるが、フランスの母親は少しちがう。「あれを買って」と言い張る子どもに、なぜ買ってやらないかを理づめでこんこんと説明し、さすとというのがよくみられる光景であり、年端もいかない子どもにはたして分るのかと思われるくらいに、理屈っぽい叱り方をする。そして、ことばで説明しても分らない小さい幼児については、お尻をたたいたりしても、かれらの欲望が容れられないことを教えるというわけである。

ここからふりかえれば、あの「マテオ」の悲劇も、イ

ンペースナルなひとつの規範に即して行動しえなかつた少年への制裁として解される。それは、ペースナルな熱い父子の情にも優先すべきものなのである。もちろん、作品にはなんらえがかれることのない父マテオの内面の激しい葛藤を讀者のおのが想像し、体験することによって悲劇の非劇性がいっそう強められるのだが。「少年間諜」の老いた父親の突然の従軍・出征が少年にもたらず残酷な教育も、こうした規範の教育にはかならない。

ちなみに、しつけとか子どもへの教育がもしこのようなものであるとすれば、愛憎の感情生活との区別は比較的容易となり、その混同はかなり避けられるのではない。いわゆる「感情的に叱る」という行為は、規範のしつけとは相容れないのであり、多くの親はそれとなくこのような区別の感覚をそなえているように思われる。しつけにきびしく、お尻をたたくことも辞さない母親が、同時に惜みなく愛情を表現し、子どもを抱きしめて接吻せぬにする母親であることも可能なのである。しつけにきびしいからといって、子どもへの愛情表現を怠ることも

なく、また子どもを熱愛しているからといってしつけをおろそかにするわけでもない。少なくともわたくしの知っている範囲のフランス人の家庭では、こうしたけじめがはっきりつけられているらしいことがうかがわれる。食事のテーブルで母親が肉を取り分けて皿に入れてくれるとき、五、六歳の幼児がごく自然に「メルシー・ママ」と答える。夜の九時頃になると親は幼児を寢室に退らせるが、ここで駄々をこねる子はほとんどいない。だが、そのとき、親はかならず子どもに「おやすみ」の大きな接吻をあたえ、自分の愛情の表現とするのである。

考えてみれば、愛情表現を大切にすることとは、しつけを効果的ににおこなうための必要不可欠の条件なのかもしれない。たとえば九時就寝というきまり（規範）を守らせるために子どもを追い立て、従わなければきつく叱責する親は、反面、子ども憎しで叱っているのではないのだということを分らせなければならぬし、もしそれを伝えることができなければ、子どもはいたずらに不安や恐怖をいだくことにならう。愛情関係に不安定さ



を感じている子どもにきびしいしつけはできないとすれば、まさに両者は補完関係に立つのではなからうか。

ひるがえって思うに、われわれ日本人は子ども可愛さからか、あえてきびしい規範のしつけをこころみず、子どもとのあいだに親和的關係が自然に保たれていると思っ  
っているためか、それほど意識的に愛情表現を追求しようともしない。以前、フランスのある地方都市で三歳の長男を幼稚園に通わせていたころ、朝、幼稚園の玄関でわたくしや妻が手をふるだけで子どもと別れるのをみていて、園長の婦人が「なぜ接吻をしてやらないのか、子どもが不安がらないか」とたずねてきたことがある。それ以来、仕方がないのでわたくしも妻も、接吻のまねごとのようなことをして子どもと別れることにしたが、このときは大いにとまどったことを今も記憶している。

### 学校ではより自由に

というわけであるから、子どものしつけにおける家庭、ことに両親の役割は大きく、早くから規範にむけて

の社会化は始まるようである。のちに述べるように幼稚園や学校ではしつけ教育にあまり重きをおかないから、それは家庭でおこなわれなければならないといえるし、また家庭でのしつけがなされていればこそ、それとは異なる学校教育が可能になるのだともいえる。その辺りはまさに相互的なのだろう。

こうしてフランスの親たちは、就寝時間を守り孤独と暗闇に耐えること、親に対しても「メルシー」ということを忘れないこと、大人の会話に口をはさんだりこれを妨げてはならないことなど、ある程度おとなの世界の規範に合致して行動することを幼児期から教えこむ。この点について多少の疑問もあったので、わたくしはある時フランス人の友人に意見をもとめてみた。「子どもに我慢することや孤独に耐えることをあまり早くから教えずなくとも、いずれ時がくれば具体的状況に直面して必要に応じて習得するのだから、あえて幼い時からひとりぼっちの不安にさらしたり、欲求不満を経験させる必要はないのではないか。」それに対し、すでに育児経験をも

つその友人の答えは、「自分たちもそう育てられてきたんだ。少しきびしくしてでも、子どもが規範を習得して早く自立するほうがよくないかね。それに、自立すれば、あとはわれわれ親はあまり子どもに干渉しないよ」であった。是非はともかく、ひとつの育児の論理としては筋が通っているといえよう。

そのためか、家庭の外の学校という場では、しつけ教育の占める位置は低くなるようである。この点について『フランスの親子・日本の親子』（NHKブックス）の著者有地亨氏はある比較調査にもとづきつぎのように書かれている。「フランスの教師が児童に対してきまりを守らせることをきびしく要求しているかといえば、そうではなく、最低であって、むしろ日本はアメリカについては非常にきびしく、教師は児童にきまりを守らせることを要求していることになる。このきまりを守らせることについては、フランスと日本では、教師と母親の場合が逆になっている。フランスは、母親は子どもに対してきまりを守らせることをきびしく要求するが、教師はそれほ

どきびしく要求しない。日本の場合は、教師はきまりを守らせることを児童に対してきびしく要求するが、母親はわが子に対してはきびしさを欠く対応の仕方をする。」

これはわたくしが経験したことともある程度符合する。先ほどふれたように、わたくしが子どもを通わせたのは幼稚園だけであるが、その幼稚園の降園時間に子どもを迎えに行つて、担任の保母さんに——ことばが不自由であるから、そういうこともふくめて——「今日はなにも問題はありませんでしたか」とたずねると、きまつて「なにも問題はありません、よく遊びましたよ」という返事が返ってきた。子どもがそ、そ、をしたことを後で知ったときも、おなじ返事であつて恐縮したことさえある。子どもの話をきいても、保母さんに叱られたという経験はないようで、朝の登園時には実に楽しみに園内にかけてこんでいくのであつた。

小学校からコレージュ、リセーへとなるともう少し別の色々な問題もでてくるようだが、こときまりの遵守といった点では、べつに制服があるわけでなし、他にこま

ごまとした規則があるわけでもなし、生活指導に学校がそれほど立ち入ることもないので、生徒はうるさくいわれることはないようだ。さきほどの友人のことはでいえば、この年頃になれば、家庭でも親からあまり干渉を受けなくなり、自立していくわけだから、規範の習得という子どもの時期はほぼ卒業したということであろうか。中学から高校という、日本では学校が生徒の生活指導にかなり神経をすりへらす時期であるだけに、このあたり、日本とのちがいは大きいようである。

### 近況から——少年の喫煙をめぐって

さて、わたくしは一昨年から昨年にかけて久しぶりややや長期のパリ滞在の機会をもった。半年ほどだったが、腰を落ちつけて日常生活に入っていくことができ、最近のいろいろな変化にも気づくことができた。若干の感想をのべておく。

カルチェ・ラタン内の大学関係のふるい建物で占められているある敷地の一角、表からみえにくい物影で、ラ

ンドセルを背負った二人の少年がなにかごそごそやっている。「こんな所になぜ小学生が？」と不思議に思いつつ通りすがりにふと目をやると、少年たちは顔をしかめながら、しかしおかしいほど真剣な表情でタバコを吸っていたのである。これは、わたくしがフランスでみたかぎりでの最低年齢の喫煙者であった。

また、有名なシャルトルの町の大聖堂を訪ねての帰途、モンパルナス駅へもどる汽車のなかで、せいぜい十五歳位とみえる小柄な少女が、時々喘をしながらもひっそりなしにタバコを吸いつづけ、周囲の乗客の好奇とも非難ともつかぬまなざしを浴びているのに出くわした（もちろん、喫煙車輛のなかでのことである）。このまなざしに抗するかのように、少女が時々挑戦的な眼でおとなたちをにらみ返していたのも、印象的であった。

かと思うと、パリの町なかのあるタバコ屋で、タバコをくれと小銭をさしだしたロティーンの少年にたいして、「あんたが吸うの？ それならわたしは売らないよ」とピシヤリと一言、女主人がツンと顔を横にむけてしら

ん顔をしている光景に出あったこともある。反対に、ロティーンと思われる少年になんのがめだてもせずタバコを売っている店もあったことを付けくわえておこう（この国にはタバコの自動販売機はない）。

パリで眼にしたこんな情景をわざわざするするのは、なにも喫煙の低年齢化⇨少年非行問題といったおきまりの観点からではない。道徳的価値判断は措いて、わたくしに印象的だったのは、ロティーンの少年少女たちの「自立」がさらにいっそう進んだな、という一点である。家では喫煙をうるさく禁じる親もいるだろうが、その裏をかいてかれらは冒険に乗りだす。これをピシヤリと封じようとする大人もいることは右に書いたが、せいぜい不快の色をこめたまなざしで牽制するか、あるいは「仕方がない、吸いたいならば吸わせておこう」とする大人、そして親も相当にふえてきているという感じをもった。虚々実々の攻防といえようか。

そんなことを考えながら、このことを話題にすると、わたくし所属していた研究機関につとめる一児の母の

あるフランス婦人はこともなげにいう。「子どもたちは好奇心からタバコに手をだすけど、ずっと成人まで吸いつづけるわけではない。しばらく吸って『もういいや』といってやめる子も多い。タバコがつまらないものと知るよい実地経験じゃないかしら。」べつの友人は、こんなふうにもいう。少年少女がタバコを吸うのがなぜわるいかを親が子に説明することはむずかしい。健康にわるいというならなぜ成年は吸ってよいのか、人に迷惑をかけるというなら禁煙の場所やタバコぎらいの人のいる所で吸わなければよいではないか、ということになってしまい、それ以上の説得は困難である、と。

後者の友人のことばは、いかにもフランスの家庭教育の特徴をものがたっていて面白い。「文句をいわずに親のいうことをききなさい！」とか「いけないものはいけないのです！」といった叱り方の通用しにくいこの国では、なるべく普遍的な規範に即して行動の是非を説いていかなければならないが、そうになると、成年がタバコを吸うのはよいが未成年者は吸ってはいけない、というこ

とを納得させる論理はできにくいことである。

とすれば、きわめて逆説的な意味で、フランスの家庭教育は今日なお健全ということになるのだろうか。

そんなことを考えさせてくれる別の小さな出会いをもわたくしは経験した。

パリからトゥールへの旅行の途次、汽車のコンパートメントでリセーのひとりの生徒とさし向かいになった。

旅の気安さで二、三言葉を交してみると、年長のわたくしを意識した丁寧な表現で、好感のもてる知的な返事が帰ってくる。しばらくすると少年はやおらタバコを取り出し、火をつけた。わたくしが「へえ、君はタバコを吸うの」となんとなく口にする、「御迷惑でしたか、すみません」と急いでもみ消そうとする。それに及ばないとその手を制して、わたくしたちは話しをつづけた（もちろん、それは禁煙のコンパートメントではなかった）。

途中のある駅で下車をするとき少年は、「よき御旅行とよきフランス滞在をお祈りします」と、きちんとした表現であいさつをし、握手をもとめ、コンパートメントを

出ていった。タバコを吸う高校生にすがすがしい印象をもった、といったらまことに奇異にひびくだろうが、これはいつわらざるひとつの感想である。

さて、ごく最近のパリでわたくしの見聞したこれらのことを、読者の方がたはどのように受けとめられるだろうか。この国のしつけや教育の現状と問題点をうかがううえで、若干の手がかりにはなりうると思うのである。

\*

以上は、子どものこと、教育のことをまともに深く考えたり、勉強したこともない一社会学徒の、それもまずしい外国経験にもとづく手前勝手な子ども論である。非専門家の短見と実感重視から必然的に生じるであろう視野の一面性にたいして、ねがわくば読者諸氏が寛容であられんことを。

(お茶の水女子大学、社会学)